

研究発表

マルクス『資本論』における「本源的蓄積論」－「小農」理論の視座－

隅田 聡一郎（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

マルクスは、『61-63 草稿』において、リチャード・ジョーンズの『地代論』などの著作における「小農理論」を徹底的に研究している。それによって、「資本の外部」すなわち、「共同体」に基づく自給自足的生産として、「小経営生産様式」の Kategorie を明確化した。このことは、『資本論』「本源的蓄積論」とりわけ長らく論争の対象となってきた「個人的所有の再建」論を適切に解釈する上で決定的に重要だと思われる。しかし、この点については、新 MEGA で刊行された『資本論』第二版・フランス語版に依拠した研究は未だなされておらず、「論理的に」は自給自足的「共同体」を完全に解体することによって成立する資本主義的生産様式、「歴史的に」は特にイングランドやイングランドの植民地アメリカで見られた国家暴力・規律権力による解体過程を明らかにすることが求められている。

本報告では、『61-63 草稿』や『資本論』第二版・フランス語版などのテクストクリティークを通じて、マルクスの「小農理論」が彼の経済学批判にとって持つ核心的意義について考察を行いたい。